

オンライン開催です。
ご自由にご参加いただけます。

海が結ぶ日本と世界

— 渋沢敬三と日本常民文化研究所 —

●●● 趣旨 ●●●

コロナ禍はいみじくも地球規模で人間存在の有り方をさまざまな方面で再考する機会をわれわれにもたらした。現代社会は情報機器の発達により人々の日常生活の出来事が瞬時に地域を超えて伝わるだけでなく、人の移動もグローバル化し、コロナ世界感染の主要因ともなった。今後、「コロナ禍以前・以後」は人々の社会認識に大きな影響を及ぼすことになる、その中で民俗学の方向性はどうかあるべきであろうか？

維新以来、横浜の地は日本を代表する海外への窓口となってきた。クルーズ船来航に始まるこの度のコロナ禍への対応は、黒船来航による攘夷から開国へ、渋沢栄一の生涯を描く現在放映中の大河ドラマ『青天を衝け』の主題にも重なる。その意を継ぐ栄一の孫、渋沢敬三も早くから海、海外から見た日本を意識し、設立したアチック・ミュージアムの調査・研究活動の一つの眼目にした。経済人でもあった渋沢敬三は二つのミンゾク(民俗・民族)学を多方面から支援し、その同人とともに海民や民具を主な対象とし、絵引きや写真・映像による非文字資料の可視化、博物館建設を通しての学問の公開化など、先達の柳田国男、折口信夫とは別の角度から庶民、常民の学としての民俗学樹立を志向した。その後身の日本常民文化研究所は本年度で100周年を迎える。

いずれにしろ、ヒト・モノ・情報が地域を超え、また瞬時に行き交う今日の国際化、情報化社会において、「郷土研究」に始発した日本民俗学も一国民俗学から柳田国男が念願した「世界民俗学」への視野の拡大が求められる。21世紀の民俗学は地域に暮らす住民同士が、まず自身の「郷土」を知り、国や民族を超え、生活レベルで互いに理解し、孤立ではなく共感、連帯する意識を持つことが前提となる。「世界常民学」の可能性をともに考えてみたい。

■日時 2021年10月9日(土) 13:00~16:00

■会場 オンライン開催 参加方法は日本民俗学会第73回年会サイト <https://www.nenkai73.fsnet.jp/> をご覧下さい。

■趣旨説明■ 佐野賢治(神奈川大学名誉教授) 郷土研究から世界常民学へ

■パネリスト■

安室 知(神奈川大学) 渋沢敬三の自然観—魚名研究とその学史的意義—

藤川美代子(南山大学) 海に生きる女性—船上生活者と海女—

飯田 卓(国立民族学博物館) 海を越えて続く鉄路—現代に生きる渋沢敬三のフィールドワーク観—

加藤幸治(武蔵野美術大学) 自民俗誌の可能性—農漁民の覚醒—

■コメンテーター■ 松田睦彦(国立歴史民俗博物館) 後藤 明(南山大学)

■総合討論司会■ 山本志乃(神奈川大学) 丸山泰明(神奈川大学)